



Title	モンゴルの祖先崇拜に関する考察：『モンゴル秘史』に見られるカテゴリーを中心として
Author(s)	娜仁格日勒
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58757">https://hdl.handle.net/11094/58757</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	娜仁格日勒			
本籍(国籍)				
学位の種類	博士(言語文化学)			
学位記番号	甲第24号			
学位授与年月日	平成15年3月27日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士			
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻			
学位論文題目	モンゴルの祖先崇拝に関する考察 —『モンゴル秘史』に見られるカテゴリーを中心として—			
論文審査委員	主査	教授	橋本	勝
	副査	教授	西村	成雄
	副査	教授	杉村	博文
	副査	助教授	角道	正佳
	副査	京都学園大学教授	若松	寛

## 論文の内容要旨

本稿「モンゴルの祖先崇拝に関する考察——『モンゴル秘史』に見られるカテゴリーを中心として——」は、オンゴン(祖先を葬った場所)、供養、禁忌など祖先崇拝の主要な項目を取り上げ、祖先崇拝の変容を示すとともに、固有な信仰要素を明らかにし、モンゴルの祖先崇拝の特徴が遊牧文化に根差す死霊恐怖観念の要素にあることを解明し、モンゴルの祖先崇拝の概要を再現することを試みたものである。

外来文化の影響によって、モンゴルの祖先崇拝は大きな変容を遂げ、複合性を有するものとなった。外来文化の一つは16世紀末からモンゴル地域に本格的に浸透しはじめ、後にモンゴルの固有な信仰であったシャマニズムに取って代わり、支配的な地位についたチベット仏教である。チベット仏教の压制下で、モンゴル人のシャマニズムおよびそれと関連する祖先崇拝をも含んだ多様な習俗はチベット仏教の影響を強く蒙り、後者と妥協しつつその教義を部分的に受け入れるに至り、複合性を明確に示すこととなった。

いま一つは農耕文化である。モンゴルは古い時代より農耕文化と接触し、その影響を受け続けてきたが、なかんずく、内モンゴルに関してはとりわけ中国の影響が著しく観察される。清朝時代に始まった漢族の大規模な進入および農耕化の進行は内モンゴルの遊牧の急速な衰退をもたらした。生産様式の変化ならびに漢族との雑居によりモンゴル人の生活習慣、文化信仰は変わらざるを得なくなった。農耕文化がモンゴル人の祖先崇拝にもたらした変化は多く見受けられ、とくに農耕の進んでいる地域では異文化の表出がより鮮明となる場合も認められる。

しかし一方では、農耕化の進んだ内モンゴル人においても固有の習俗・信仰が彼らの精神世界のなかに尚大きな比重を占めていることもまた事実である。したがって、固有な信仰要素が残り続けるとともに外来文化の浸透も著しく、モンゴル独特の複合的構造を持つ

祖先崇拝が形成された。こうした祖先崇拝は複合性から生じた複雑性を帯びている。複雑性の一つの現れは地域差が大きいということである。複雑で多様な表現形態のなかから一体どれが固有な信仰に属し、どれが外来文化の要素と見なしうるかを明確に見分けることは困難な場合もある。そのために、固有信仰として認めうる要素の選定を13世紀のモンゴル語文献『モンゴル秘史』（以下『秘史』と略記）に限定することとした。なぜなら、『秘史』には祖先崇拝を含む固有信仰の本質的なものが反映され、固有な信仰として認めうる要素すべての原形が『秘史』のなかに求められるからである。すなわち、『秘史』に見られる祖先崇拝のカテゴリーを中心として、これらのカテゴリーまたはそれが表現する習俗の現状を把握したうえで、祖先崇拝の概要を再現する。

従来、シャマニズムに関する研究のなかで祖先崇拝の個別の内容が触れられることもありはしたが、専門的な論述は少なく、系統的に考察した研究は見られない。本稿はこのような研究状況にもとづき、祖先崇拝を再現するにあたって、多様な表現形態のなかから共通性を把握し、まだ指摘されていないその固有な特徴——祖先崇拝の基調を成している死霊恐怖観念の要素——を見出し、それがモンゴルの遊牧文化に根差していることを強調する。

したがって、まず第1章では祖先を葬った場所を表す概念——オンゴンについて考察した。祖先を葬った場所には様々な名称があるが、オンゴンはもともと普遍性を持っている。しかしながら、オンゴンという言葉は多義的に使用され、文化人類学の視点からその基本的な意味についての見解は一致していない。なお、オンゴンに対する研究は多くがラシードの『集史』に基づき、モンゴル語文献に関する考察が欠けている。それゆえ、オンゴンの基本的な意味についての不一致が生じた。筆者は13世紀から17世紀までの四つのモンゴル語文献においてオンゴンの有無およびそれが如何なる意味合いで使用されているかを確かめたうえで、オンゴンの基本的な意味を確定し、その一つは祖先を葬った場所であるということを改めて確認した。

第2章では引き続きオンゴンを取り扱い、主として盛り土を検討した。現在モンゴルでは、祖先を葬った場所の形態に地域差が見られる。すなわち、牧畜（または主牧従農）地域と農耕（または主農従牧）地域との区分に対応して、目印となる盛り土の有無という差異が見受けられる。それでは、盛り土の有無の差異が生じた要因は何であろうか。この問題を解明するため、盛り土の出現した歴史時期ならびに当時の社会状況について考察を行った結果、18世紀の半ば頃モンゴルに盛り土が出現していたことが判明した。すなわち、この時期から漢族の大量な進入がもたらした人口の異常な急増および農耕の大規模な拡大、それと対応する遊牧の衰退が盛り土を必要とさせたのである。言い換えれば、遊牧には死者を葬った場所を標す必要が無いのみならず、土を盛ることが牧畜に適さない。だが、農業を営む場合開墾のため死者を葬った場所を標さねばならない。一方、盛り土は漢族が影

響を及ぼした結果であるにもかかわらず、モンゴル人独特の性質が認められる。それは、盛り土に関する禁忌のなかに潜んでいる死霊恐怖観念の要素である。

そして第3章では祖霊の供養——トゥレシについて検討をすすめた。祖先への供物を燃やして供える習俗は『秘史』のなかに確認でき、固有の習慣であるが、現在一部の地域に存在し、ほかの地域では認められない。すなわち、その存在は盛り土の有無とほぼ一致し、盛り土を築く地域ではトゥレシを営み、盛り土を作らない地域ではそれが見られない。通過儀礼としてのトゥレシはモンゴル人の固有な習慣であり、年中行事である清明節および大晦日のトゥレシに外来文化の影響が認められる一方、トゥレシを営まない習俗にはチベット仏教の死後観——人間の死後その靈魂が転生するかまたは極楽の世界へ行くため、供物を必要としない——の影響が認められる。さらに、トゥレシの時期、実施する際のおきてを逐一考察し、そこに潜んでいる死霊恐怖観念の要素を確認した。すなわち、トゥレシは定まった時期のみに住居から離れた場所で営み、住居のなかでは営まない。とくに火で供物を燃やす習慣は火崇拜の観念にもとづいており、火が浄化の力を持ち、家筋の象徴などの信仰が見られる一方、また死霊を追い払う力を持ち、祖霊と子孫との境界としての機能を果たし、火を以って祖霊が人間についてくることを防いでいる。

続いて第4章において祖先崇拜における女性禁忌、すなわち女性の参加が禁じられるもしくは制限を加えた上で参加が許される習慣を考察した。この習慣は『秘史』ではイナルということばで表現されている。祖先崇拜のいくつかの内容たとえば盛り土の有無およびトゥレシを営むか否かに地域差が認められるが、祖先崇拜における女性禁忌の習俗は今なおモンゴル全土にわたって共通している。

女性禁忌は祖先崇拜の領域のみならず、シャマンに係わる分野ならびにシベリアの狩猟においても見られる。このような女性禁忌は如何なる理由に基づくのか。それについて、狩猟領域に関するかつての研究で指摘されたつぎの見解つまり女性は劣っている、穢れているという観念はもともと広く行き渡ったものであるが、それは後に生じた考えである；真の原因は動物の死霊から女性を保護することに求められる、という主張を参考にし、実証を通して、モンゴルの祖先崇拜におけるイナルも女性保護のためであると分析した。すなわち、イナルは祖霊が汚されないようにという目的のためではなく、女性が祖霊のもたらす害を避けるためであり、女性自身に関心が寄せられている。

第5章では『秘史』におけるジュゲリを考察し、祖先崇拜とシャマニズムとの関係の視点から祖先崇拜における死霊恐怖観念を論じた。モンゴルのシャマニズムの起源は祖先崇拜と関わっており、両者は密接に結び付いている。祖先崇拜とシャマニズムとのつながりの基本的要素は死霊恐怖の観念である。その一つの現れはジュゲリつまり犠牲動物の頭、蹄のついた毛皮を木にかける習俗である。この習俗は主として祖先崇拜の場合に見られていたが、後にシャマニズムのテングリ (tngri : 天神) 祭祀を中心として見受けられるよう

になった。してみれば、祖先祭祀とテングリ祭は元来共通性を持つものであったに違いない。逆にいえば、共通性を有しているからこそ、祖先祭祀の或る特徴がテングリ祭のものに変化し得る。この共通性の基礎は死霊に関する信仰である。

最後に供養における相違点をめぐって日本の祖先崇拝と若干の比較を行い、モンゴルの祖先崇拝の特徴をさらに明確化した。

モンゴルの祖先崇拝における死霊恐怖観念の特徴はかれらの遊牧文化に基づいている。遊牧生産の移動性、生活の在り方によって死者、死霊さらに祖先、祖霊について深く考えることはなかった。それは彼らの精神世界のなかに深く根差し、中国の農耕文化ならびにチベット仏教といった外来文化を多く受け入れた地域においても固有な信仰の要素がなお根強く残りつつある。とりわけ、生産様式が変化し、すでに定住化した地域の人々にとっても信仰のなかに定着した要素として受け継がれてきた。

一方、歴史・社会の変遷にともない、モンゴルの祖先崇拝に顕著な変化が少なからず生じており、祖霊に対する考え方、感情のなかに所謂愛情の成分もある程度認められる。すなわち、祖先の恩恵に対する感謝、祖霊の加護への希望、といった倫理感、親愛感が増しつつあることは否めない。それにもかかわらず、全体を眺めれば、それが基調となっているとは言い難い。祖霊に対する恐怖によって祖霊を好意的な存在にするためよりも災いをもたらさないようにという意識がはるかに大きく働いている。かれらの祖先崇拝は恐怖とともに崇敬と愛情の念も併せ持つものであるが、根底には依然として恐怖感が基調をなしている。祖先崇拝の概要を描き出すことを試みる際、その中に潜んでいるこのような固有な信仰の要素により注意を向けることとし、それをモンゴルの祖先崇拝の特徴であると見なし、本稿では死霊畏怖ではなく死霊恐怖という概念を使用し、主としてこの特色に焦点を当ててきた。祖先崇拝が家族次元や親族の範囲を超えて民族的・国家的次元において言われる場合もあるが、本稿は家族・親族次元において行われているレベルに限定し考察している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、断片的にしか記録されていなかった事例を丹念に渉猟し、自らの内モンゴルでのフィールドワークによる裏付けも併せ、モンゴルに固有の祖先崇拝に関して初めてその全貌を明らかにした点が評価される。

論文を通じて一貫した主張がなされ、モンゴルの固有の祖先崇拝を死霊恐怖観念と定義づけ、女性禁忌の真の原因は女性が劣っているためではなく、女性を保護することにあることを裏付けた点に特に独創性が認められる。

渉猟した文献は中国、モンゴルのものはもちろんのこと、広くロシア、ヨーロッパ、アメリカに及び日本の文献も広範に検討されている。文献の範囲は宗教関係の文献や民族誌

のみならず、史料、旅行記、民話集にまで及び、少しでも関連がありそうな記述はほぼすべて検討の対象とされている。

本論文では『モンゴル秘史』より4つのカテゴリー（キーワード）を抽出し「オンゴン」「トゥレシ（火で燃やす供物）」「イナル（祖先崇拜における女性の禁忌）」「ジュゲリ」を中心に論が進められている。「オンゴン」には(1)守護霊並びにその偶像、(2)葬地、(3)トーテム、(4)神聖または聖なるもの、の4つの基本的な意味があるが、その意味の変化を、歴史文献の面から探り、いつ頃からその意味で使われるようになったかを明らかにしている。「トゥレシ」に関しては漢族と違ってモンゴル族は飲食物も燃やすことが論じられ、「イナル」に関しては女性禁忌の原因を女性の匂いに求めるロット＝ファルクの説を退け、女性を保護することにあるというウノ・ハルヴァの説を補強する根拠が詳細に論じられている。さらに、従来、一種の祭祀という程度の認識しかされていなかった「ジュゲリ」についてその言語学的分析にも注意を払い検討を加え、対象並びに供物についての考察が進められている。

埋葬の形式における風葬の地域と土葬し盛り土を行う地域との違いが遊牧と農耕の地域の違いに対応し、後者が漢族の影響によるものであることを、単に地理的な観点からのみならず歴史的な観点からも論じてある点に説得力がある。

本論文の終章では日本の祖先崇拜、祖先供養との比較検討もなされており、供養の対象、供養の場所、祖先の祀り手、供養の時期の点から、その違いが述べられている。日本の事例の多くはR. J. スミスの著作に依拠しているものの、モンゴルと日本の祖先に対する態度、儀式の違いを浮き彫りにし、モンゴルの祖先崇拜の特徴をさらに明確にした点が高く評価される。

今後の課題としてはチベット仏教と中国農耕文化がモンゴルの祖先崇拜に与えた影響についてより精緻な検討がなされなければならないであろう。また、モンゴル系の民族の居住する各地域においてフィールドワークを行ない、その実態を一層詳細に把握する必要がある。

本論文は、モンゴルの祖先崇拜の諸項目を取り上げその概要を体系的に検討しモンゴルの祖先崇拜の特徴が遊牧文化に根差す死霊恐怖観念の要素にあることを実証した。この分野の研究を新たな水準にまで高めたと言える。

以上の諸点から本論文が博士(言語文化学)の学位を授与するにふさわしいものである点について審査委員全員の意見が一致した。